# 黄文雄の「歴史とは何か」

＜日・中・台・韓＞の歴史の差異を巨視的にとらえる

黄文雄
著書二〇〇冊余
論文等二二〇〇編超——
「この本は私の歴史書の**集大成**です。」

黄文雄の「歴史とは何か」

黄 文雄

ISBN978-4-908979-00-2
C0020 ¥1500E

9784908979002

1920020015008

定価：本体 1,500 円 ＋税

発行：自由社

## 歴史戦に勝つために！

日・中・台・韓の歴史を比較検証

**文明と歴史の関係を鮮やかに解明する！**

◎歴史とは何か
◎中華文明の原理
◎中国の残虐な戦争の歴史
◎人を殺さないで発展した日本の歴史
◎日本を平和の中で発展させたのは天皇の存在だ
◎中華文明から仕掛けられた歴史戦に日本が負けない方法は

目次

序章……9

第一章　歴史とは何か……15

一、認識された過去の事実は過去の事実そのものではない
二、「認識」ということの厳密な意味
三、「認識」と生の衝動に基づく共通の尺度
四、関心の大きさに基づき歴史の記述が残る
五、歴史への関心は文化や文明によって異なる
六、歴史認識のうち最も多く存在するのは自己への歴史認識
七、意味を読み取るために比較を必要とする理由
八、歴史認識から影響を受ける人間の歴史的行動
九、地政学的に影響を受ける歴史的行動
十、「史説」と「史観」について

第二章　中華文明の原理……53

一、中華文明の淵源としての黄河文明
二、「国家」に代わる「天下」
三、中華文明の中核となる戦争の意味
四、論理的に破綻している易姓革命の政治理論
五、「民」「人民」の通性
六、近代国家の「国家文明」との比較

第三章　中国の残虐な戦争の歴史……87

一、中国古代の戦争

二、中国初期の「京観」と「万人坑」のモニュメント
三、侯景の引き起こした「南京大虐殺」
四、唐の時代は食人文化の最盛期だった
五、明代の戦争
六、清と中華文明
七、辛亥革命以降の中国

## 第四章　人を殺さないで発展した日本の歴史……111

一、考古学から見た日本
二、壬申の乱―皇位をめぐる最大の戦争
三、殺生を嫌った日本の文化
四、武士道とは何か
五、日本に食人文化はない

## 第五章　日本を平和の中で発展させたのは天皇の存在だ……131

一、古代の天皇
二、中世の天皇
三、江戸時代の天皇
四、天皇の存在あって克服できた幕末の危機
五、偉大なる明治維新
六、五箇条の御誓文と大日本帝国憲法
七、現行憲法の奇妙な解釈

## 第六章　中華文明から仕掛けられた歴史戦に日本が負けない方法は……155

一、日本は世界のために歴史戦に負けてはならない
二、歴史観に必要な巨視的に全体像を見る眼
三、歴史戦に勝つためにはまずは日本国内を整えよ
四、国連などあらゆる国際組織を活用する

五、領土問題も国連など国際機構で解決する
六、歴史戦は存在してはならないもの
七、歴史戦を超えて

対談 この書を振り返って …… 184

著者 黄 文雄
新しい歴史教科書をつくる会 前会長 杉原 誠四郎

歴史とは史実に拘束された主観
歴史は自己認識から始まる
「天下」は「国家」ではない
鄧小平の過ち
これほど人を殺した歴史はない
孔子は人肉を食べなかった
日本の歴史を見るには地政学のほかに生態学も必要
壬申の乱でも百姓を殺すなと言った
天皇は日本の歴史の結晶
公民教科書と、権威と権力の分離
「大日本帝国」は日本歴史の精華
韓国や台湾は大日本帝国の輝かしい遺産
自虐的になりすぎている歴史教育
外務省は何をしているのか
教科書で戦う歴史戦
ぜひとも教科書づくりに協力を
歴史戦は国連で戦え
歴史戦は「超限戦」の中の一つ
素晴らしかったオバマ大統領の広島訪問

黄 文雄・主要著書一覧 …… 242

# 序章

史観は国家、民族によって異なるだけでなく、文化、宗教によっても違う。さらに利害関係によっても違う。個人や団体だけでなく、世界の潮流によっても、時代によっても変化がある。日本での戦後の歴史をめぐる「認識」の対立は、同様に台湾にもあった。台湾では歴史教科書は国定である。歴史教科書の改編をめぐって、九〇年代に「歴史教科書改編」理由を説明する会場を中国人グループが襲撃するという暴力事件やら、李登輝時代、中国人がつとめている中学校の校長が中学生の社会科の新しい教科書の採用を拒否する事件があった。

日本の高校生は、ことに受験生は、大学受験に熱中している。台湾の高校生は、大学生が「ひまわり運動」で、国会議事堂にあたる立法院を占拠した後、高校生も反教科書運動に立ちあがった。

戦後の南の韓国と北の北朝鮮は、同じ歴史、文化、民族、言語を持つにもかかわらず、歴史認識の相異のため、近現代史だけでなく、李朝から高麗朝までに遡って、史評と史観までちがう。もっと極端なのは、南北両国とも国連に加盟しながら、両国とも相手国の現実的な存在を認知しない。日本政府も、無理押しされて、北朝鮮を承認せず、つまり韓国の一部であるとする非現実的建前を受け入れている。もちろん韓国内部の与野党の史実、史評、史観の対立は、殊に「順北派」と「保守派」との対立は両極端である。

さらに高句麗はいったいどっちの「国史」かをめぐる半島の朝鮮と大陸の中国との対立も有名である。

中華世界をめぐる史観の対立は、数千年来ずっともめにもめてきた。近現代になってからは、国共両党（国民党と共産党）が対立するだけでなく、中国共産党内部でも、文革について、一応党決議で「十年動乱」にしたものの、毛沢東についての史評は今では「功過半々」に止まっている。正統主義をめぐって、劉知幾の〝史通〟は南北朝とも「正統王朝」として認知しているのに対し、司馬光の〝資治通鑑〟は「南朝」しか「正統王朝」として認知していない。清の雍正帝（五代目）は満州人の中国統治について、「道統」（道徳的正統性）を唱える〝大義覚迷録〟を著した。中国という存在は、大元や大清の時代に、はたして世界地図から消えたのか、「その存在」については、中国文化人の間でも意見が異なる。二〇世紀になって、「革命の父」とされた孫文も、「中華民国」名づけの親とされる「国学大師」の章炳麟も、中国「二度亡国」論の代表的存在である。

ところでインド人と中国人の史観はまったく逆である。インド人からすれば「歴史」はただ時間の流れの経過の一現象にすぎないと考える。人間にとってより大切なのは、たとえば死生とは何かを問う宗教など、最も根源的、本質的な事物である。中国人が「正しい歴史認識」云々することに対しては、インド人は「どうでも好いことだ」「興味ない。勝手にしろ」という「歴史」意識しかない。パキスタンとは同種族でも、「宗教」が違い、それぞれ「我が道」に別れる。「オレの道を行く」セイロン（スリランカ）に対しても、「インドは一つ」とか「絶対不可分」とか「統一したい」などとは言わない。

では中国人とは本当にそれほど歴史大好きかというと、決してそうではない。史実に近い歴

史の『三国志』よりも巷間の大河小説である『三国志演義』の方が好きである。『三国志』はたいてい「六朝史」が専門の歴史学者以外には、歴史専門家でさえあまり読まない。一方毛沢東は『三国志演義』を何度もくりかえして読んだ。政治闘争に勝つための奥の手として読んだのである。

　戦後日本の歴史教育は、ロシアから「社会革命」を目指すいわゆる「コミンテルン史観」やアメリカからのいわゆる「東京裁判史観」が濃い影を落とした。さらに八〇年代に入ってからは「中華史観」の影響が強い。「コミンテルン史観」や「東京裁判史観」は私が観るところでは、すでに「過去形」であるのに比べて、中韓両国からの「正しい歴史認識」強要などは「現在進行形」である。

　私は小学五、六年から、中学、高校時代とも、中華民国の伝統的歴史教育を受けたので、いわゆる「コミンテルン史観」にも「東京裁判史観」にも洗脳されなかった。確かに中華史観で育てられたものの、戦後台湾の中華民国体制は多くの台湾人からすれば、外来の「華僑王国」と見做されている。台湾人と中国人とは、アイデンティティだけでなく、あらゆる面でむしろ対立関係にある。毛沢東の言葉を借りれば「対立矛盾」であるので、歴史意識としては、むしろアンチ中華史観がひそんでいる。

　では中華史観とは、いったいどういう史観なのか。最も簡単に言えば『春秋』が説く「華夷の分別」「春秋大義」「尊王攘夷」と『史記』の皇帝中心史観、そして『資治通鑑』の正統主義、これらに加えて新儒学としての朱子、王陽明、王夫之ら三大儒学者が強く説く華夷分別の思想、夷狄（異民族）の虐殺を中国語の表現で「天誅」と言って正当化する、自己中心主義と優越性を強調する中華思想から生まれたのが、いわゆる中華史観である。

　中華思想と中華史観の洗脳教育で育てられた台湾人の中には、マインドコントロールされたままでいる人も大勢いるが、醒めた眼で、世の過去、現在、そして未来まで展望するアンチ中華史観の人も少なくない。私もその一人である。

　戦後、中韓からしきりに日本に押し付けられているいわゆる「正しい歴史認識」に基づいて「反省と謝罪」を繰り返す日本政府のパフォーマンスは、「歴史」ではなく、「政治」である。「歴史」をどう認識するか。「正しい」か「正しくない」かの価値判断は、どちらがより史実に近いかを「省察」する必要はあるが、「反省」云々の「政治的行為」に振り回される必要はまったくない。

　「歴史」への自由や「歴史」からの自由は、自由主義社会の主流価値であり、自由主義国家の国体も政体もその自由の認知によって成り立っている。全体主義国家にはその自由がない。

　だから、中国の言う「正しい歴史認識」は、全体主義的歴史認識であって、史説、史観の多様性、多元性に反するものである。それを許容、認知するだけでも、日本の国体、政体に反するだけでなく、憲法違反（第二〇条・信教の自由）、（第二一条・表現の自由）でもある。

　より史実に近い歴史の省察、検証から言えることは、日本近現代史の史評で、「万死に値する

大罪」と言えるのは、「戦争に負けた」ことだけではないだろうかと思う。私とほぼ同世代の台湾人の多数がそう認識している。

私の知っている限り、満州事変後、国際連盟で「日本はむしろ被害者」、と演説したのは松岡洋右（ようすけ）だけである。より客観的に歴史の空間（スケール）を広げ、歴史の時間（スパン）をもっと長く伸ばしていけば、近現代史において日本の貢献はじつに大きく、いくら評価しても、し過ぎるということはない。

私は日本近現代史の史実の再検証を本書で進めたい。読者には、歴史とは何かという史眼を養い、全体主義史観の呪縛から解き放たれることを望みたい。

私はこれまでたくさんの歴史書を書いてきたが、私のこれまでの歴史書の集大成として、この本を日本の読者に贈りたい。



# 第一章　歴史とは何か